

友だちどうし

小川未明

青空文庫

乳色ちちいろの冬ふゆの空そらから、まぶしいほど、日ひの光ひかりは大地だいちへ流ながれてい
 ました。風かぜのない静しずかな日ひで雪ゆきのない国くにには、やがて、春はるが間ま近ぢか
 へやってくるように感かんぜられるのでありました。

年としちゃんは、紅茶こうちゃの空あきかんの中なかへ、ガラスのおはじきを入い
 れていましたし、正しょうちゃんは、ほうじ茶ちやの紙かみの空あき袋ぶくろの中なかへ、ガ
 ラスのおはじきも入いれていれば、また、秋あきの暮くれにお宮みやの大きおおきな
 木きの下したで拾ひろった、銀杏ぎんなんの実みも入いれていました。

毎まい朝あさ、洗あらい清きよめられる玄関げんかんの外そとのアスファルトの上うえに、二ふ
 人たりはしやがみながら、たがいにおはじきを出だして見みせ合あったり、
 取とりっこをしたりして、遊あそんでいました。年としちゃんの持もっている、

青い色のおはじきは、町へお母さんといっしょにお使いに買って買ってもらったもので、眼鏡のようにして、すかして見ると、空も、家も、木も、うす青く、遠く、遠く、なつて見えるので、ちゃん魔法の眼鏡と自分で呼んでいる、大事な、そして、好きなおはじきでありました。また、正ちゃんの銀杏の実は、自分が木から落ちたのを拾って、いいのだけを択んだもので、たとえばおはじきを五個でも、一粒の銀杏の実とは換えがたい貴いものでありました。二人は楽しそうに、自分のものを出したり、入れたりして、自慢しあつて、仲よく笑つていたのです。

そこへ、見知らぬ、一人の少年がやつてきました。「なにしているの?」と、さもなつかしそうに、少年は、い

い寄りよりました。

「おはじきをしているのだよ。」と、年としちゃんが、少しょうねん年を見みました。

「僕ぼくも、仲なかま間に入いれてくれない？」と、少しょうねん年は、頭あたまを傾かたむけて、
二人ふたりの顔かおを見みたのであります。

いかにもその少しょうねん年は、弱よわ々よわしそうであり、さびしそうで
もありましたから、「ああ、お入はいりよ。」と、正しょうちゃんがいま
した。

少しょうねん年は、喜よろこんで、二人ふたりと並ならんで、アスファルトの上うへへしや
がみました。

このとき、年としちゃんが、「君きみの家いえは、どこだい？」と、少しょうね

年んに、ききました。

なぜか、少しょう年ねんは、恥はずかしそうにして、だまっています。
「町まちの方ほう？」と、正しょうちゃんが、いいました。少しょう年ねんは、だまっ
て、ただうなずきました。

「僕ぼくに、おはじき三個こばかり、貸かしてくれない？」と、少しょう年ねん
は、正しょうちゃんの顔かおを見みました。

「君きみ、おはじき持もっていないのかい。」と、正しょうちゃんは、少しょう年ねん
年んにいつて、年としちゃんと相そう談だんするようように顔かおを見み合あわせました。

「どうしたら、いいだろう？」と、心こころに思おもったからです。断ことわるの
も、なんだか意い地じ悪わるに感かんぜられるし、また、これまで話はなしたこと
もない、少しょう年ねんが、おはじきを持もたずに、仲なか間まへ入いれてくれと

いうのも、ずるいような、まちがっているような、気がしたからです。しかし、おはじきの上手な年ちゃんは、自信を持っていました。

「いいから、貸しておやりよ。正ちゃんが二個、僕が二個、貸してやろうよ。」と、年ちゃんが、いいました。

「貸してくれる？ ありがとう。」と、弱々しい、青い顔の少年は、急に目を輝かして、お礼をいいました。

「だが、君が、負ければ、もう貸してやらないから。」と、年ちゃんが、念を押しました。

「いいよ、僕が、負ければ、もう貸してくれといわない。そして、今度きたときに借りたのは返すからね。」と、少年は、答え

たのです。

「いいから、しようよ！」と、正ちゃんしょうちゃんは、元気げんきでありました。

三人にんは、輪わになって、おはじきをはじめました。しかし、その

少年しょうねんは、恐ろしく感かんじたほど、おはじきがうまかったのです。

年としちゃんは正ちゃんしょうちゃんが、いくら戦たたかつてもさんざんに負まかされてし

まいました。最後さいごに年としちゃんの大事だいじにしておいた、青あおいおはじき

も、また、正ちゃんしょうちゃんの持もっていた銀杏ぎんなんの実みも、すつかり少しょう

年ねんに取とられてしまつて、少年しょうねんは、ただ借かりた四個よこだけをア

スファルトの上うへへ残のこして、あとのさらつた分ぶんをポケットに入いれる

と、

「さようなら。」といつて、さつさといつてしまいました。

とし
 年ちやんと、正ちやんの二人は、ものもいえずに、泣き出しそ
 うな顔つきをして、少年の後ろ姿をうらめしそうに、見送つ
 ているばかりでありました。

* * * * *

少年の姿が、見えなくなつた時分、あちらから英ちやんが、
 ボールを空へ投げ上げながらきました。そして、年ちやんと正ち
 やんが、元氣なく、ぼんやりとしているのを見て、

「どうしたの？」と、英ちやんは、ききました。二人は、少年
 の話をしました。すると、

「どっちへいった？ 卑怯のやつだ！ 僕が、取り返してきて
 あげるよ。」といって、英ちやんは、駆け出しました。

町まちの方ほうへつづく道みちには、人影ひとかげが、ちらほらと見え、チンドン屋やの音おとなどがして、にぎやかそうでした。

「英えいちゃんは、強つよいから、けんかをしたって、負まけはしないね。」
と、正しょうちゃんが、心配しんぱいしながら、いいました。

「僕ぼくだって、あんな奴やつ、やつつけられるんだよ。」と、年としちゃんはいって、なぜもつと早はやく、この勇気ゆうきが出でなかつたものかと後こうか悔いしました。

ふたり二人ふたりは、英えいちゃんの後あとを追おって、町まちの方ほうへ駆かけ出だしたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 一」講談社

1977（昭和52）年9月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「小学文学童話」竹村書房

1937（昭和12）年5月

初出：「児童文学」

1937（昭和12）年1月

※表題は底本では、「友《とも》だちどうし」となっています。

※初出時の表題は「友達同志」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年12月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

友だちどうし

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>